

佳作

七月二十二日二十三時一五分

奈良県育英西高等学校二年 森澤華花

「トクン、トクン、トクン、…」

暖かい光に包まれたその部屋の真ん中に、少し不自然に布団が敷かれていた。布団のそばに恐る恐る近づき黙って座った。その部屋には、母と母の妹である和ちゃんそして助産婦さんと研修中の助産婦さんの見習いの方が少し緊張した表情で慌ただしく、お産の準備に追われていた。少し緊張している私に向かって小声で

「赤ちゃんの心臓の音だよ。」

と、教えてくれた。少し機械っぽいその音は元気に「トクン、トクン」と繰り返し聞こえてきた。さっきまで少し病室のようなその音が私を不安にさせていたのに、母の言葉で不思議にもその音は赤ちゃんの元気を知らせる魔法の音に変わった。

時折苦しうに顔をゆがめる和ちゃんに、助産婦さんの一人は、やさしく声をかける。

「自然にいきみたい時にいきんでいいよ。自分の楽な体勢でいいよ。」

生まれたすぐの赤ちゃんは、本当に赤く、でも、不思議なことにもその赤ちゃんの眼は大きく開いていた。すぐさま和ちゃんのお腹にうつぶせで置かれた赤ちゃんは安心してきつった顔を和ちゃんに見せた。和ちゃんは嬉しそうに赤ちゃんに話しかけていた。そして、胎盤も綺麗に和ちゃんのお腹から出てきた。胎盤につながれたへその緒、なんと私が切らせてもらえらることになった。消毒された鉗を手渡され、少し説明を受けて、切り離す。責任重大である。鉗を持つと急に緊張してきた。『ジョキ』そんな音が私の手を伝って頭に響いた。とても言葉では表せない感動を覚えた。想像よりとても、柔らかかなそのへの緒が、赤ちゃんと和ちゃんを繋いでいたことが不釣り合いにも思えたのだと思う。子宮に包まれていた赤ちゃんはとてもきれいで、びっくりした。部屋中にみんなの笑顔が溢れる中、赤ちゃんは少し事務的に、体重を測ってもらい綺麗にされていく。私の耳に、少し前に気になっていた雨音と雷が再び戻ってきた。

二〇一九年七月二十二日二十三時十五分、私はこの瞬間をきつと何度も思い出すことになるだろう。きつと、この甥っ子を見るたび、そして、成長するたび、お誕生日を迎えるたび、この夜の出来事を私は、思い出すことになると思う。私が、自分の子供を産むときには、きつと、今日の日を思い出し、そして安心することが出来ると思う。今日を迎えるまでは、私の中で出産は少しの恐

それに答えるように右を向いたり、左を向いたり、そして片足をあげるようになったとき見習い中の助産婦さんは、少しぎこちない動きで和ちゃんの赤ちゃんがもうそこまで来ていること、子宮口が全開に達していることを助産婦さんに告げた。そして、見習いの助産婦さんが和ちゃんの呼吸と陣痛に合わせてリズムよく声を出した。

「ふう、ふう、ふう…。」

そして、今までよりも強めに腰をさすってあげていた。助産婦さんが和ちゃんに、何かに掴まったほうが楽になるよ、と促した。母と私は和ちゃんの手に自分の手を合わせた。私の手は、和ちゃんに強く握り返された。段々、息づかいの間隔が短くなってきたのが分かる。助産婦さんが和ちゃんに

「上手、その調子。」

と少し強めの口調で繰り返し返す。私は和ちゃんの手が強さを感じながら助産婦さんと窓の外の強い雨音と雷の音を無言で聞いていた。

「破水したよ、来るよ。」

その言葉を聞き終えてすぐ、和ちゃんは私の手を強く握ってきた。一秒、二秒、三秒、私の眼の中に、スルツとその赤ちゃんは現れた。

「おめでどう。元氣、元氣、男の子。」

そして間髪入れず、

「うぎゃー。」

怖と不安があった。今夜、その気持ちは吹き飛んだ。病気では無く、とても自然で、とても神秘的だけれども、どこか動物的なこの出産という瞬間に十七歳の女子高生が立ち会うことは本当に貴重で幸せな体験だといえるだろう。出産に立ち会うことを提案してくれた和ちゃんにとっても感謝している。自宅出産するという最先端ではない出産は、自然で生理的な、そして動物的な出産ができるのだと思う。この出産方法に対して、私は今回とても感動し憧れを抱いた。確かに、最小限の設備を持ち込んだだけの自分の部屋はデメリットも多いとは思いますが、本来の出産を自分の赤ちゃんのカと妊婦さんの本来の力で出産できるということにとっても感動した。ドラマや映画での出産シーンを遥かに超えた。苦しむことなく生む姿をまじまじと見た。和ちゃんは、出産を楽しんでいる、うれしいという。よく、出産は苦しい、痛いというが、全く違っていた。和ちゃんは、何度も生みたいという。羨ましいと思う。

この十七歳の夏の最高の感動は、女性であることをとても誇らしく、素晴らしいものだと思えることが出来るものだった。